

〈詩〉

## 斜光

川を挟んで立つ駅を降りる  
若葉を持ち始めた桜並木が迎えてくれた

ベンチには花びらが一枚

春の嵐の置き土産でしようか

東の空には雲の色をした月が  
見え隠れしています

気がつくとながいがい木の影が  
いくつもいくつも生まれていました

ながいがい道のりと影をつれて  
斜光はわたしのころの中にも差し込んでいました

(A・E)



### ●随筆

## 母と子

秋山喜作（草の根運動運営委員）

母は、天皇制侵略戦争（太平洋戦争）未亡人33歳。私3歳。慰問の時、上官が兵士の父にビンタ。それ以後、軍隊と基地がだいきらいだと言っていた。私は、小三で、進学を諦める。二十代前半で社会の矛盾に気づく。農家の手伝い少々、食べ物腹いっぱい。

母は働き者の親だった。涙の理由は忘れるなど…。貧乏は一生ついて来ないと…。

母は自民党员、核廃絶、基地撤去、医療福祉関係、憲法改悪反対と消費税をなくす会の署名に応じてくれた。

2000年、要介護5認定。兄弟のつれ合いの協力でローテーションを組み、私が食事を与える役。協力していただき感謝！ 私はツツッタ！ 90歳で。看取（みと）れなくて親不幸だった私。（湯河原 71歳 神奈川遺族会員）

（編集部 秋山喜作さんは、国鉄労働者で、国鉄労働組合員でした。また、沖縄返還同盟員でもありました。普天間署名などに懸命に取り組んでいます。）